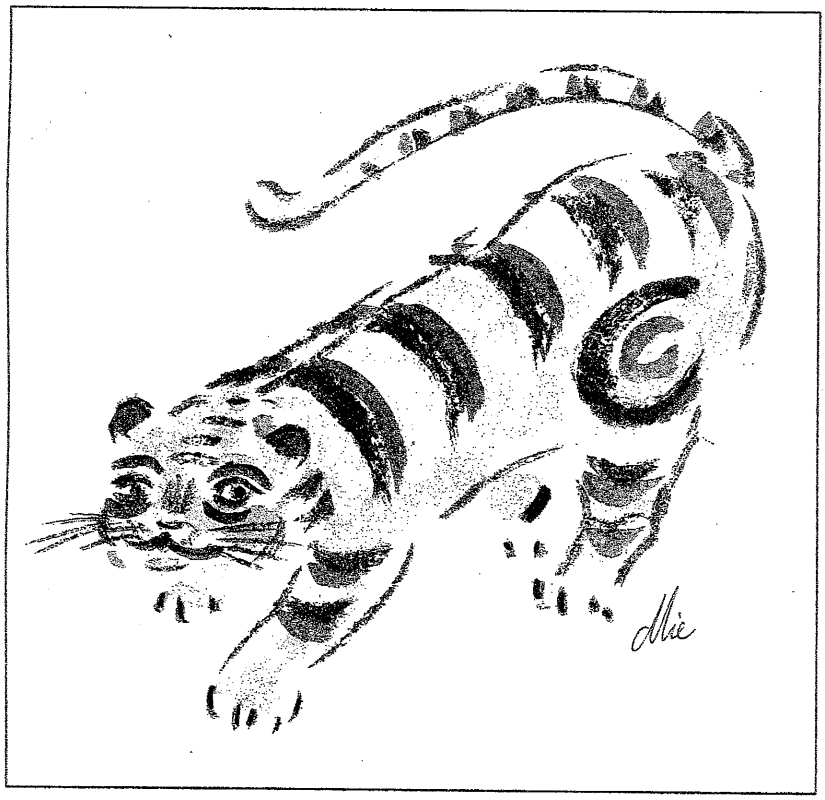
オリーブの樹

第94号
2009年12月20日

شجرة الزيتون

早期釈放！重刑策動をはね返し、重信さんを支えていこう！



目次

P　2　感謝を込めて連帯の挨拶を送ります　　重信房子
P　3　十一月の歌　　重信房子
P　4　独居より　変革の新年を共に！　　重信房子
P11　読者からの声
P12　アラブ物語（6）ーリッダ闘争への道（4）　　重信房子
P15　シゲに捧げる私小説　その80　　山田美枝子

重信房子さんを支える会

感謝を込めて連帯の挨拶を送ります

２００９年の皆様の友情と支援、励ましに感謝し、２０１０年、新しい社会の変革を求め、連帯し、共に進みます。

２００９年は、私にとっては、身体と命の洗濯のような年となりました。

ちょうど一年前、２００８年１２月の仕事納めの日に大腸癌と告知されました。２００９年1月末には、大阪医療刑務所に移監となり、2月初めに手術を行いました。横行結腸とＳ状結腸の２カ所の癌の摘出の予定が、開けたところで、それよりも進行していた稀な小腸癌も見つかって摘出しました。そして、抗癌剤治療をはじめたところで、2月末に東拘に戻され、今も抗癌剤治療つづけて元気になっています。人間は切ったり縫ったりしても、生命力旺盛で、定命の日まではしぶとく復元するものだとしみじみ実感しました。

そして、また、みんなのお陰で「日本赤軍私史―パレスチナと共に」を治療の合間を縫って校正を終え、出版することができました。これも命の洗濯の如き作業でした。「オリーブの樹」に２００６年から連載した日本赤軍の政治的な歩みを再整理し、とらえ返しつつ一冊に残すことができたのは、大変幸せなことでした。共に闘った世界の日本の仲間たち友人たちの孫の世代の人に読んでもらえるように、時代とその中での自分たちの活動の一面を記しました。この作業は病気の中で、一人では到底完成させることはできませんでした。岡村先輩をはじめとする友人たちに感謝します。

この一年、癌の治療と「日本赤軍私史―パレスチナと共に」で身体と心の命の洗濯、リペアをしながら、これからの変革のあり方を考えていました。

その間、不況の中で、日本も自民党の官僚警察国家政治が破綻し、やっと「政権交代」がはじまりました。

民主党を中心とする三党連立政権に限界があるのは当然です。でも、そこから一歩でも「現実を変える」変革を育ててほしいと願っています。「情報公開」を要に、これまでの大企業や自民党官僚支配の犯罪行為を国民の前に明らかにし、裏で憲法も法も無視してきた現実を問う必要があります。「密約」「基地」「沖縄」「裏金」など、こうした政治のデタラメさが地域も家族も社会もバラバラにしてきたのを実感します。新年こそ地道に闘いつづけてきたみんなの力が「沖縄」や「死刑制度」まで、現実変革に発揮される年となることを願い、連帯します。

そして、また一方、パレスチナのガザに起こった虐殺が今も繰り返されている現実の世界があります。その現実の世界に日本も責任を負っています。「沖縄」や「基地」を問う日本の闘いの中から、この責任が強くうながされる新年であってほしいと思います。

また、新年は最高裁判決も間近です。今の司法の実情を直視すれば、判決確定からはじまる新しい旅は今より厳しい条件を覚悟しています。私の方から手紙を書いたりこれまでのように会って話すことも難しくなるでしょう。どんな隘路の旅であっても、私は友情の中に居ること、抑圧されたパレスチナの人々や世界、日本の闘う者たちの連帯の中にあることを誇りとして進みます。その確信がいつも私に楽しい夢を描かせてくれます。「オリーブの樹」に書ける条件ももう長くありませんが、限られた新年の日を感謝と連帯の旅立ちへの日々として大切にしたいと思っています。

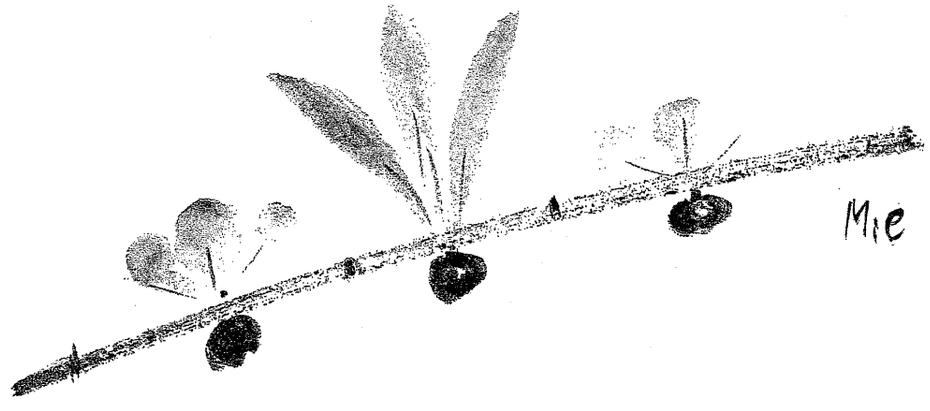
変革の新年を共に！

房子

十一月の歌

重信　房子

ほうせんか人知れず咲き種飛んで晩秋に赤く朽ちかけて立つ
獄舎にも木枯し一号吹く夕べ千両二本の苗届きおり
寒空を雲の隙間の満月に守られて行くお使いの日のあり
夕焼けを背にして君の舟が来る答えの解けぬ我が胸のうち
連帯を求めて孤立を恐れずといいし我らは求めたか連帯
風に乗り黄葉一片足下に掌にとり秋の暮れゆくを知る
金色の光集めて地中海満月たゆとう冬の花びら
差し入れの絹のブラウス着てみれば吾子と遊びし浜思わるる
銃口の小さき穴に魅入られたヒューマニズムの求愛を聴け



独居より　11月10日―11月11日

変革の新年を共に！

重信　房子

11月1日　旅半ば逮捕9年癌1年
上告審の判決近し

ちょうど去年の11月の定期検診の折に、腫瘍マーカー検査を申し出てから、1年になります。はじめは卵巣嚢腫の悪化を調べるためで、癌の病気は予想していませんでした。控訴趣意書を作成して、2007年から控訴審がはじまる前に卵巣嚢腫が発見されました。手術した方が良いと言われましたが、結局、控訴審さらには上告趣意書提出を終えてから再検査の上手術しようと決めていました。そして、上告趣意書を2008年6月末日に提出し、「日本赤軍私史」の原稿を10月に終えた後の去年11月です。定期検診があったので、問題になっていた卵巣のチェックをしてもらうつもりで、腫瘍マーカーの検査のための採血をお願いしました。

ところが、採決後しばらくして、「どこか消化器系に異常はないのか？ 卵巣より消化器系に問題がありそう」と言うのです。そういう自覚症状はないと答えると、そのまま理由は告げられず、検便の潜血反応検査、レントゲン検査などが行われました。そして、12月1日の診察の時、医務部長から潜血反応もあり、腫瘍マーカーがCEA36．5もあって、異常が消化器系にあると思われると言われました。卵巣の方は何の異常も数値に表れていないとのことです。CEAが通常値5．0のところ36．5と言われてもピントきませんでした。

こうして翌日からCT検査や胃腸の内視鏡検査がはじまって、年の瀬の仕事納めの日に、大腸の腺癌と告げられたのでした。

その後は、1月大阪移動、2月手術、また東京へと現在までの抗癌剤治療へとつづいています。

この癌の疑いのはじまりがちょうど11月で、1年になります。それに私が逮捕されたのは2000年11月8日で、この11月で9年になります。

また、10月下旬には、ハーグ事件被告の和光さんが10月27日付けで上告が棄却されたと知りました。彼より数ヵ月遅れて、私の公判ははじまっており、私ももうすぐ上告審判決が出そうな時間となっています。今年中か来年早々に判決と言う時間の制限の中に居ます。そのことを改めて自覚したところです。

また、9月中旬から新しい抗癌剤に変えてから、副作用も強かったですが、腫瘍マーカーがぐんと下がりました。手術前からのマーカーの数値がどうしても下がらず、9月には45まで上がりつづけていたのが、10月には20．1に下がったのです。

検査では見つからないほどの小さな微小転移がどこかにあれば、それが徐々に大きくなって再発することになります。その意味で、抗癌剤で腫瘍マーカー数値が下がることは、大切なことらしいのです。私も数値には一喜一憂しないと言いながら、一喜一憂しています。

ちょうど上告審判決が出る頃には、抗癌剤治療で腫瘍マーカー数値が正常化していると良いのですが。今はストレスを避けてリラックスするようにと言われながら、もう自由に面会文通する時間がないかも……と思うと、オーバーワークになってしまいます。現在の司法の動向からは、被告の考えは棄却されるのを覚悟せざるを得ません。その分、12月には書類も全部整理しなければ……と思っています。

そんな訳で、治療と残務整理のこれからに時間を大切に使いたいと思います。でも、元気で楽しみを描きつつ、時間と競争中です。家でも端座を崩さない静かな父よりも、心配性の割には楽天家で、大胆で、かつミーハーの母の気性を受け継いだ私は、なんでも一応心配する割に、楽しく描いてしまう癖があります。

今は、第2クールの投薬（4週間服用して、2週間休薬で1クール）期間中です。初回の時のような激しい副作用はまだ出ていません。味覚障害、涙目、末梢神経の異常か、指先の皮が固くなり、アカギレみたいになり始めています。苦しい動悸・吐き気・下痢は今のところないので、助かります。

ちょうど10月末に、明大学苑会（二部中執）OB会がありました。OBで亡くなられたIさんら他の方々も追悼しつつ、母校での集いです。招待状を送ってくれたのはとても嬉しくて、行きたいけど行けない！ と電報を打ちました。先輩や仲間たちの話しに加わりたい私です。OB会では先輩方が多いので、私は下級生の若輩の方です。行ったらみんなに叱咤叱咤激励されたいのですが、残念！ でも、そんな秋日和を楽しく描いています。

今日の日曜日、OB会を考えつつ、昔もよく行った大学の周りの神田古本市を考えつつ、購入した「ガンサポート」抗癌剤総力特集で、自分の薬について学習中です。

10月26日には、臨時国会が開会されて、鳩山首相、初の所信表明が語られました。官僚の作文でなく、「自分の言葉」で語り、官僚依存から政治主導、国民主導の新しい政治に180度転換するという52分の演説とのことでした。明治維新からの無血の平成維新であると位置づけ「今日の維新は、官僚依存から国民への大政奉還であり、中央集権から地域・現場主権へ、島国から海洋国家への国の形の変革の試みです」と述べて描く新しい国づくりを宣言しました。

これから、その立脚点に則って、どう、その内実がどこまで、はかれるかでしょう。少なくとも、その真剣な取り組みは開始されています。

また、これまでの鳩山首相自身の偽装献金による検察官僚の揺さぶりにどう対処していけるのでしょう。郷原信郎元検事は、「政治資金規正法に違反するのは明らかですが、それほど悪質性があるとは思えない。過去刑事責任を問われたのは、いわゆる“やみ献金”とされる賄賂性のあるものが多かった。鳩山首相のように、自分の多額の資金を政治資金管理団体へつぎ込むことが問題にされた事例は、過去にありません」と述べています。しかし、特捜部は首相の母親含め、北海道の選挙区での個人献金偽装など公職選挙法違反による起訴を、来年通常国会前に視野に入れているとか。

また、これから小沢秘書の公判もはじまります。国民主権を実体化していく「政権交代」。革命は暴力革命より平和革命が最良であるのは、歴史の教訓です。しかし、革命の中で制度のみならず人間の意識や関係性が変わらなければ、革命は保守化して支配層を形成してしまい、弱体化していきます。民衆の側に立ちつづけることができるかどうかがメルクマールでしょう。しかし、人民主権、国民主権の徹底が難しいのを、様々な国の歴史で見てきました。日本の体制内変革の一歩の政治交代は「維新」たりうるでしょうか。

国民の側が少しでもましになる政策へと監視しつづけることで、前向きな一歩に進んでほしいものです。

すでに「官僚支配を改革するために」と称して、郵政改革では「天下り官僚」を起用したり、記者クラブのオープン化や機密官房費公開など、平野官房長官は変更差し止めしたり、国家権力を持ったところで、「やっぱり……」ということも多々あります。ジグザグしながらどこまで国民主権が貫けるでしょうか。

パレスチナでは、アメリカの言いなりのアッバス大統領に対するファタハを含むパレスチナ人民からの厳しい批判が続きました。10月の国連人権理事会のゴールドストーン報告書の採決を延期したためです。その後あまりの民衆の不信に恐れをなしたアッバスらは、それを撤回しました。

そして10月14日、バハリン、バングラディッシュ、ボリビア、キューバ、チリー、エジプト、インドネシア、ヨルダン、ニカラグア、パキスタン、フィリピン、カタール、サウジアラビアなどと共に、18カ国共同提案として、ゴールドストーン報告書の採択を16日に行いました。25カ国がゴールドストーン報告を承認し、6カ国が反対、11カ国が棄権しました。日本は棄権しています。

ゴールドストーン自身ユダヤ教徒であり、イスラエルを支持してきた人物でした。ゴールドストーンは「報告書を読んでいない者たちが感情的に反発している」と、反論しています。国連総会で、このイスラエルの戦争犯罪は問われるでしょう。そして、すでに「人権に対する犯罪」で逮捕訴追を恐れて、ガザ攻撃の司令官で、今もイスラエル国防相バラクは、英国への外遊を取り止めたりしました。

パレスチナでは、2006年にハマスが政権に就いて以降、イスラエルとブッシュ政権はそれを正当に認めず、経済制裁によって全パレスチナ人への懲罰行動とアッバスらへの一方的な軍事、情報、財政的支援をしてきました。こうしたことが外的要因となって、パレスチナの分裂を拡大させました。抵抗の権利を譲らないハマスに対するガザ攻撃は、パレスチナ人の抵抗を育てたばかりか、イスラエル人に排外主義を増大させ、ガザ攻撃直後のイスラエル総選挙を経て、ネタニヤフ政権を生み出しました。

入植地拡大や東エルサレムのパレスチナ人追放を強化する、この新拡張主義政権を、ブッシュ時代と同じように、オバマ政権は支持しています。

アッバス大統領らは、欧米がアッバスを支持しており、和平の道があると、パレスチナ人民に対して幻想を振り撒いてきました。今回の国連人権理事会の事件は、はっきりとアッバスがアラファトではないことを示しました。アラファトは少なくとも外交交渉の最後に、パレスチナ人の権利を犠牲にする取引はしなかったからです。1999年キャンプ・デービッドで、クリントン、バラクの圧力に対しても屈せず、原則を守

りました。「和平合意をつぶしたのはアラファト」と、イスラエル側からキャンペーンを張られました。シャロン政権に代わると、大統領府攻撃すらも受けながら闘ったことによって、彼は今も英雄です。アッバスはただ屈しただけでした。

今、ファタハ内でも、人民からの怒りを受けて、アッバス派は、人民の要求に沿った策で乗り切る手立てを考えざるを得ません。

また、エジプト仲介のパレスチナ挙国一致・和解のための交渉も、決着がつかずにあります。エジプト案では、大統領選と自治評議会総選挙を来年６月１０日に行うこと、その選挙方式は、７５％を比例区とし、２５％を選挙区とすること（ハマスは、選挙区は２５％でなく、４０％にすべきと主張していました）や、ガザ地区にファタハのセキュリティ部隊３０００人を戻すことなどが記されているとのことです。また、同時に自治区外のパレスチナ人を含むパレスチナ民族評議会（ＰＮＣ）の選挙も実施するとのことです。合意案によると、ファタハとハマスの指名で、各８名、計１６人の合同委員会が自治政府に代わって統治にあたる、その長はアッバスとし、他のＰＦＬＰら、非主流各派はハマスの指名枠で、加わるということらしいです。

ハマスは、エジプト案がこれまで合意も討議もしていないことが合意文案として加えられていると、合意に慎重です。当初、ハマスのリーダー、ミシャールも和解と統一に積極的な動きを示したところで、１０月のアッバスらの国連人権理事会の動きで、話し合いは進みませんでした。

その後１０月２６日の合意をめざすとして、エジプト案が示され、１５日、ファタハは合意すると表明しました。ハマスやＰＦＬＰは合意文の中に、イスラエルへの抵抗権を確認する文を入れるべきとして留保していました。左派は、パレスチナ解放、占領に対して抵抗する権利をあいまいにしては署名できないと主張してきました。（「オリーブの樹」９３号、１０～１１頁のハマスとＰＦＬＰの合意などに示されています。）

そのため、２６日の合意署名を待たずに、アッバスは、突然来年の１月２４日に、自治政府大統領選と評議会の選挙を行うと発表しました。これまで早く大統領選をやるよう主張して来たのはハマスです。ハマスは、この突然の大統領選提案を「パレスチナを独占的に支配するための動きだ」と、反対非難を表明しています。アッバスの主張はパフォーマンスで、時期的にも無理な表明です。

ガザの封鎖がつづく中、アメリカの後押しで、西岸地区だけの選挙が実施されれば、分裂も封鎖も固定化されてしまいます。

パレスチナはそんな１０月でした。和解のための討議が再考されるでしょうか。

１１月２日　曇り空木枯し一号吹いたらし
秋から冬へと儀式の気配

寒い。朝から寒くて、重ね着。今日は８時過ぎから入浴の指示。一番風呂です。ゆったりと湯船に浸かって深呼吸。湯船で届いたばかりの高校生の１５枚の長文の細かい字の手紙について考えていました。

彼は若松監督の「浅間山荘への道」を見て、その感想を切々と書いてくれました。これまで考えもしなかったこと、また、名前すら知らなかったのに、「なぜ連合赤軍なのか？」と、映画から考えはじめたと、映画の場面を追いつつ考えたことを記してくれていました。「正義のために闘うことは大切で、正しいことではないか。この人たちはそういう人たちではないか？ と思った」と、ありました。

若い人々に私たちの闘いの時代の社会の雰囲気とその時の熱い情熱を共に語り合える人間でありたいと強く思いました。

ちょうど「情況」１１月号も１０月末に届きました。そこには「日本赤軍私史」の書評が載っていました。パンタさんと小野沢さんの同時代人として受け止めようとする暖かい眼差しに励まされています。また、若い田口さんの率直な提起を嬉しく読みました。

また、昔の友人物江さんの批評もありました。「私史というより、回想は１９８８年までである」というタイトルです。１９８８年までも回想ではありません。現在進行形ですよ！ と言いたいところです。でも、こうして旧友や新しい世代の方々が批判も含めて意見や感想を届けてくれるのはありがたいことです。

１１月３日　文化の日朝一番の冷え込みと
ラジオから知る立冬近し

もうすっかり寒くなったと思ったら、今朝はこの冬一番の冷え込みだったとのこと。午前中に、友人から速達が届いて、用事の他に紅葉の山々を歩いた楽しい様子が伝えられました。

この休日、ちょうど昨日友人が送ってくれた「村上春樹と小阪修平の１９６８年」藤沢周平の「暗殺の年輪」「逆軍の旗」、宿題を差し置いて一気に読書三昧。文化の日だからいいか……と。

１１月４日　告知放送年賀はがきの申し込み
最後の新年挨拶書こうか

今日で抗癌剤の服用の第２クールの１週間目。前に比べてずいぶん副作用もおさまっています。まず、食道気管のドクドクが今の所一度もありません。味覚障害、涙目、指先の硬くなることなどはつづいていますが、下痢もないのでずいぶん楽です。副作用が弱い分、効かないのかな……と思いつつ、服用中です。それでも、やはり、野菜ジュースの他に、梅干、お新香の惣菜を購入して、お茶づけのあっさりしたものが今は好物です。肉、油物、コーヒーなども食べられません。

寒くなってきました。でも、９時まで運動房に居る３０分の間に、どんどん陽が当たり、晴天になりはじめました。獄庭のせいたかあわだち草も茶色に枯れて、小さな草むらは枯草が立っています。プランターの小さな２０センチほどの千両は緑の葉。芽の出たおしろい花は１０本以上あったのに、寒さで２本枯れはじめていて、やはり時期遅れの発芽は難しそう。

運動房から戻るとすぐ、旧友の面会。旧友は様々な問題を整理して伝えてくれて、逮捕以来分からなかったことや友人の消息などを少し知ることができました。感謝。それから投函の準備。

夕方告知放送で、未決拘禁者の年賀状購入についてのお知らせ。購入日は１回。１１月１２日交付分のみ。１１月２９日から１２月１１日までの間、年賀状として枚数制限なしに発信を受け付ける。それ以外は年賀状としては受け付けませんとのこと。今年がここから発信できる最後の年賀状だな……と、自覚。次の年からは出せないでしょうから、今年は時間の制約の中でも新年の挨拶に感謝と別れをこめて書かねば……。

１１月５日　風に乗り若葉一片足下に
掌にとり確かな秋の匂いかぐ

運動に出ると、もう寒い！ 風。房に戻って、発信や冊子小包発送準備していると、面会の知らせ。面会票の名は知人の名だけれど、今日の面会予定は他の名前です。予定変更があったのかな……、それでも昨夕もはがきの確認が来ていたので、知人の方は予約があるのでとキャンセルしてもらいました。すみません。何かの手違いだと失礼になったな……と気になりました。

先日も体調崩して寝ていたところ、刑務官の面会の知らせに、木曜日だったので姉だろうと良く確認せずに面会室に出かけてしまいました。面会室で、大切な知人に失礼してしまったのです。はがき連絡がうまくいかなかったためですが、今回も行き違いが気になっていました。でも、予定の友人は、みどりと登場。ほっとしました。久しぶりにみどりも時間調整して来てくれました。みどりもいろいろ仕事もしているし、家庭もハッピーのようす。嬉しい一瞬を語り合いました。

午後から風呂。なつかしい友人の便りと今日の夜は気持ちも晴れ晴れ。１１月７日から、上映されるというパンタさんのドキュメンタリー映画への祝いの挨拶に、詩も書いてみたくなって、夜は夢想の世界を遊泳していました。

１１月６日　忍び足静かに過ぎる獄の夜
ローマ人の物語読む

晴れの小春日和。運動房で、思い切り深呼吸を繰り返しました。爪先立ち歩き５００歩。ゆっくりと柔軟体操して、普通歩き５００歩で、もう３０分。外に出て土を踏みしめてみたい秋日和です。

房に戻ったら、新聞がちょうど届いていて読んでいたら、「アッバス議長不出馬を表明　来年の議長選」の記事。「自治区ラマッラで開かれたパレスチナ解放機構（ＰＬＯ）の執行委員会で、来年１月に予定されている自治政府の議長選に立候補しない意向を表明した。（中略）今回の不出馬表明には、イスラエルや米国から譲歩を引き出すための『捨て身』の戦術との見方もある」と、朝日１１月６日の記事です。

オバマ政権は、エマニュエル首相補佐官のせいか、イスラエルロビーの意のままです。先日もクリントン国務長官はイスラエルを訪れて、イスラエルに入植の全面凍結を迫らず、逆にパレスチナに無条件で和平交渉を行うよう呼びかけていました。国連の人権理事会といい、アッバスの立つ瀬がないまま、アッバス批判が深まっていました。来年６月の総選挙などの合意案のすり合わせの最中に、来年１月に選挙の意向も宣言していました。こうした発言はハマスやＰＦＬＰなどとの対立を深め、責任を追求されていました。アメリカは頼りにできないし、打開のためにアッバスを議長とするＰＬＯにＰＬＯ議長の辞任ではなく、自治政府大統領の不出馬を表明したようです。ＰＬＯ執行委員会（ＰＦＬＰらを含み、ハマスを含まない）の責任のもとで、解決を共同しようとする考えでしょう。「私の立場を仲間が理解してくれることを望む」と、５日夜のＴＶ演説で語ったとのこと。

ＰＦＬＰの在外政治局員マヘル・アルタヘルは、アルジャジーラのインタビューに「アッバスが１１月５日総選挙に再出馬しないと言ったことは、彼とオスロ合意に基づいた失敗の道のりの結果に他ならない」と

述べています。そして、「シオニストの占領、戦争、入植を認める一方で、パレスチナ人の民族的権利を完全に否定したのがオスロ合意だ。このようなパレスチナの大義を清算したオスロ合意に未来はない。アッバスは破産した」と述べています。

アッバスに翻意を求めるファタハのデモの一方で、「本当に辞めるなら、再出馬辞退でなく、今日辞任表明すべきだ。これは政治劇場に過ぎない」という声もあります。

新聞を読んでいると、昼食前に面会。メイはこの間の私の副作用はどうかと聞きながら、こちらはパレスチナ問題。メイに、「パンタさんのドキュメンタリー映画上映のこと知ってる？」と聞いたら、メイは７日のショウに参加するとのこと。そうか獄の私より当然情報は早いんだな。「祝花束よろしくね！」と話しているうちに、もう１２分。短い。午後はみどりのバラが届きました。それからみかんも。ありがとう。

夕方は手紙をいくつも受け取りました。友人の短歌も。また、「日々決戦一日一生」と書いたカンパに感謝。また、１０・１８の京都の集いのエピソードも。１０・１８を経て、１１・８の沖縄の集いに繋がる活動中とのこと。それからもう判決近いなと、友人たちの面会予定の知らせとか。

お便りのあれこれを考えつつ、じっくり読みながら、週末の夜更けに紅茶を飲みました。味覚障害のせいで、近頃はコーヒーが泥臭いし、飲めなくなってしまい、時々紅茶がおいしいと感じる時に飲む程度です。みかんの皮を浮かせて、レモンティのように飲みながら、みんなの手紙の一つ一つが心に染みて枯渇している歌心をちょっと掻き立てます。歌の宿題も何とかしないと……と思っています。

１１月５日の国連総会で、ゴールドストーン報告書に関して、イスラエルとパレスチナの戦争犯罪決議が可決されました。１１４ヵ国が賛成し、アメリカなど１８ヵ国が反対、４４カ国が棄権した。覚えておきたいのは、日本はこの決議に棄権したことです。

１１月７日　立冬の気配探して通気孔
開ければかそけき焚き火の匂い

週末の土曜日、ルーバーの隙間に見えるのは、工事中の働く人々。南側の建物がどんどん高くなっていますが、工事の真っ最中か、土曜日も働いています。でも、１センチ幅くらいの隙間なので、人の動きらしいのが行き交っているのが見える程度ですけど。

立冬の今日に文化活動をはじめてみようかとガッサン・カナファーニの小説「ハイファに戻って」の詩を作っておこうと思い立ちました。判決までの限られた時間でも、まだ歌ったり楽しむ余裕はあると思うけれど今のうちにと。ガッサン・カナファーニの「ハイファに戻って」を読み直しました。そして、思いを集中して一気に「ハイファに戻って」の詩を書いてみました。

これは、朗読劇「ハイファに戻って」を関西支える会「さわさわ」の友人たちが共同で作り上げる一環です。歌劇のように朗読劇に歌を加えるためです。

ハイファに戻って

（リフレイン）奪われし祖国
追放された　武器なき民は
卑怯者なのか？！
ＮＯ！ ＮＯ！ ＮＯ！ Ｎｅｖｅｒ！
我が心、我が民、我が祖国パレスチナ
服従のしもべにはならない
解放の道へ　フェダーイの道へ
さあ　歴史を拓こう

１、１９４８年
突然の侵略
乳飲子を寝かして
妻は夫を捜した
けれども戻れなかった
戻れなかった戦乱
我が子ハルドウンを残して
帰れなかったハイファの我が家へ

２、２０年の間
追放と占領
手がかりのないまま
時が流れて難民の我れ
戻りたかった
戻れなかったハイファ
我が子ハルドウンよ
お前は生きているのか

３、１９６７年
再びの侵略
全土が占領された
皮肉な占領によって
ラマッラーからハイファへ
道はつながった
我が子ハルドウンの居た
行こうハイファの我が家へ
（リフレイン）

４、昔と変わらぬハイファ
忘れえぬ我が家バルコニー
なつかしいドアが開いて
家具も昔のままに
見知らぬユダヤ人が言った
「長い間待っていました」
生まれたばかりの赤ん坊
我が息子を知りませんか

５、２０年の壁
二十歳のイスラエル兵は
ユダヤ人に育てられた
我が子ハルドウン
「なぜ今ごろ来たのか
パレスチナの父も母も要らない」
我が息子は敵兵
悲しみの痛みに笑うしかなかった
（リフレイン）

６、２０年の敵対
「父と母ならどうして
乳飲子を捨てて逃げたのか」
ああ我が息子
それは違う
占領と銃弾
お前（イスラエル）の神話は事実ではない
武器なき民を卑怯と言うのか

７、２０年の時に立つ
お前はイスラエル兵
お前の弟　いや今や
唯一の我が息子ハーリッドは
解放の戦士　フェダーイ
知るがいい再び
ハイファに戻る時は
フェダイーンの解放　パレスチナ
（リフレイン）

１１月８日　振り返る逮捕記念日年ごとに
なつかしくまたありがたきかな

今日の日曜日は逮捕記念日。「沖縄の集い」を思いつつ、パレスチナの友を思いつつの逮捕記念日となりました。

先日の友人の手紙によると、１０・１８の集いの時に、知花昌一さんの呼びかけにこたえて、１０・１８の実行委員会の人たちも１１・８の沖縄での現地集会に代表団を送ろうと決めたようです。１０・１８の１００人近い交流会で、何人もが手を上げたようです。交流会では「６５歳以上の人は沖縄現地に来い！そして進んで留置場に入ってくれ！」と沖縄側から呼びかけられて、よしと、１１・８に沖縄の集いへまっしぐらとのこと。沖縄で闘いつづける知花昌一さんは、日本の誇りです。そして、また、沖縄の人々の志に、日本の平和運動が助けられているのが現実です。

「辺野古に米軍基地を建設させるな、米軍の沖縄基地撤去。そして、日本からの米軍基地撤去。究極は自衛隊も解体です」と、友人は元気がいい。

今日の１１・８沖縄では、県内移設に反対する県民集会が開かれています。民主（民主県連代表は喜納昌吉参議院議員）、社民、共産や労組、市民団体などでつくる実行委員会が主催。一挙的には解決できないとしても、基地を撤去していく目標に向かった解決がどう実現できるでしょうか。アメリカに移す過渡期に、例えば本土に移転を引き受けることがあっても、基地縮小、撤去の道へと根本から日米関係を考え直すべきです。

今日は逮捕記念日。あの大阪から、東京に向かった車窓の日本の穏やかな秋を忘れることができません。きれいに積み上げられた稲束、朱い柿の実。穏やかでなつかしい秋を見ながら、楽しい気分になっているのが不思議なのですが、そんな気持ちでした。こうなった以上、もう何十年も使わなかった本名に立ち返って、また、みんなと本名で出会えるなと、そんなベクトルに頭の中が動いていました。大井川を渡る時には、西行の“年たけてまた越ゆべしと思いきや命なりけり小夜の中山”が思わずこぼれました。

逮捕記念日は反省と感謝と共に、再生の日でもあるな……と、しみじみと今も思います。９年目が過ぎました。みんなに、お詫びの気持ちと共に感謝しつつ、今日は宿題になっていた短歌を作ってみたくなりました。歌心は枯渇したままですが、前からテーマは与えられていながら、副作用だとかでぐずぐずしていたのですが、今日はやってみましょう。そんな風に８日を

過ごしました。

１１月９日　ベルリンの壁崩壊の２０年
あの日私の居た場を胸に

今日は１１月９日、ベルリンの壁崩壊の日です。当時の私たちは「傍観者」にはなれませんでした。夏休みからはじまった不穏な計画の情報に、欧、アジア、中東の反帝勢力は東欧政権の自己革新を求めて、みな分担して、当時の権力機関と論争説得していました。反体制派の意見を受け止めよ！ と。まだＰＬＯ自身にそうした国際主義の蓄積があった時代でした。東欧官僚機関の人々は、日本の官僚と同じで一人一人の能力は高く、良心や考え方では相通じるものがあっても、「規則」「法」「規律」に自ら縛られて、なすすべもなく崩壊に向かいました。あの時の激動は、ベイルート８２年夏をより激しく大規模にした激震でした。ベイルートと違って、頭上に爆弾が降ってくるわけではないけれど。あの当時の友人たち、逃亡したり、逮捕されたり、殺された人たちも居ました。らテン・アメリカやヨーロッパの説得を共にした友人たちはどうしているかな……と思わずにいられません。

朝、年賀状の購入の申し込みをしました。そして週末の間の作業したものなどや手紙の送付。

午後、夏以来久しぶりに大谷弁護士と面会。先生も和光さんの上告棄却があったので、私への判決が今年中にもあるのではないかとのこと。和光さんに数ヵ月遅れで公判のはじまった私は、来年早々くらいに判決と考えて、１１月１２月に整理計画を入れていたので、大慌てです。今年中か……と。ハーグ事件の「殺人未遂」に関する判断が「棄却」として有罪が出された以上、早いと考えておいた方が良いとのこと。判決が出てからのプロセスや手続きのこと何日間くらいあるのか、また、再審の可能性など、知識のない私としては先生にあれこれと質問しました。とにかく、今年中に時間切れになってもいいように、良く整理しなければ……と。

今日の新聞では、昨日の沖縄の集会に、２万人の人々が集まったとのことです。保守勢力も加わって、米軍基地の県外移転を訴えたとのこと。

また、新政権の目玉となっている行政刷新会議の「事業仕分け」の方向が整ってきているようです。１１日から、公開で、削れる無駄を炙り出すとのこと。「公開」ということが良い。もちろん日米安保や防衛問題に踏み込んで、日本の政策を抜本的に変える方向に行くとは思いませんが、公開的に予算を国民が知り、天下り事業の実体やその給与を知り、「思いやり予算」を知り、と、これまで主権者が理解しづらい国の成り立ちや実情を少しでも具体的に国民の前に提出されるのは、とてもよいことだと思います。何だ、ずいぶんデタラメな税金の使い方をしてきたな、えらそうにしても国民の税金でそれがやれたのだなと、国民が身近に感じるところから変革の必要性を知る良い手立てです。

１１月１０日　青空に爪切った指かざしつつ
自由の広さに身をゆだねおり

今日の晴天は青天井の運動房へ。爪をゆっくりと切り、もう寒さを感じる空を見上げ、工事中のクレーンの大きな動きを見ながら、歩きました。

足を洗って戻るところで面会。裸足のまま面会所へ。顔色いいね。運動中だったから。会社はどう？ まあまあ。旧友のＯさんは何しているの？ みんなに会いに行くように言ってね、などなど。この間の救援の不手際のこと含めて、せっかく会いに来てくれた友人に、愚痴になってしまいました。申し訳ないけど。

１１月１１日　おしろい花プラスチックカップの温室で
寒さしのいで生き延びている

起床したら雨。今日はもう冬。暦の立冬の後はやっぱり冬だなと思います。運動房に出ると、プランターの小さい苗のおしろい花に、一つずつプラスチックカップをかぶせて、温室のように風と寒さを遮っています。グッドアイデア。でも、冬まで持つかな。雨の音を聞くのも悪くないなと、ゆったり歩きました。

房に戻ると、姉が送ってくれた冬物の差し入れ受け取り。もう冬支度です。

午後、歯科治療。戻って面会。若い友人のディレクターの彼女の企画の話など聞いて、あれこれと夢を掻き立てられてしまいました。楽しいひと時です。

房に戻ったら、小菅新聞が届いていました。１１月９日付のNO．８号です。３月に私の弁護士が視察委員会から任期満了で抜けたとたんに、小菅新聞が全然発行されなくなったな……と思っていたところです。

今回の小菅新聞によると、「東京拘置所視察委員会」は、５月から今年度の活動を開始したとのことです。そして、今回は去年１１月に視察委が行ったアンケート結果を踏まえ、３月３１日に２００８年度の意見書を提出し、６月２３日に当局から回答を得たことを紹介します、という内容です。

項目は２２項目。たとえば、食事に生野菜を使用することについて、と。（回答は、食中毒防止から、生野菜は不使用。ただし必要十分な栄養バランスを取っている。）運動房を開放的なものにすることについて（回答は上級官庁に伝達したい。）とか。居室内総量制限の規制の枠外として六法全書、国語辞典、広辞苑を認めてほしい、（回答は、法令により決められているので、認めるのは困難。）面会時間を３０分にすること、（困難である。法令に照らして適切に判断したい。）死刑執行命令は受理後速やかに当該者に告知し、執行直前の告知にならないようにすべき、（回答、心情の安定を害することが懸念されると共に、過大な苦痛を与える。家族に対して、事前通知すると、無用な精神的苦痛、云々、取り扱いを変更することは困難である。）など。

「変更困難である」というのが多く、よくて「上級官庁に伝達したい」という内容でした。また、変更改善が伝えられてもこんな具合です。「視察委員会の意見書の提出には願箋を不要とするように」という点についてすら、（この願箋提出によって誰が意見を出すのかが当局に分かり、それだけで無言の圧力になっているとのことで）回答は「意見提出に当たっては、秘密申し立てを確保するための措置を講じているものであるが、それらのことも考慮の上、検討を続けさせていただきたい。」とのこと。

変革を求めた初の画期的な全拘置者のアンケート集約への回答は、大方は今のところは「官僚答弁」と言われるものでした。でも、これを土台にして、今後も一つずつ改善を求めていきたいものです。

レバノンでは、６月７日の総選挙以来、組閣ができなかったのですが、１３５日後の１１月１０日、やっと挙国一致内閣ができるようです。

３０人の閣僚のうち、１５ポストはハリリら新首相を支える「３月１４日連合」、１０ポストは野党、後の５ポストは大統領による指名で、内相、国防相も、その５ポストに含むことになりました。野党の主張した、どの勢力も拒否権を持たずに大統領に裁定者の役割を負わせるポスト配分なのだそうです。

これまで、大臣一人を送り込んでいたヒズボッラーには２ポストです。アルジャジーラの特派員は、ヒズボッラーが政治的に得たものからみて、内閣の人数などはたいした問題ではないだろうと述べています。「確かに、新内閣で２つの閣僚のポストを得た。しかしもっと重要なのは、抵抗の権利と武器を保持する権利を間接的に承認した新内閣の政治宣言にある」と述べています。（民兵の武装抵抗の権利を認めている、これまでの政治宣言を改訂しないまま継承したとのこと。）

ヒズボッラーは、ワシントンからは、「テロリスト組織」リストに加えられています。でも、レバノン社会では認知された合法的政党であり、また、その武装と抵抗の権利も引きつづき確保しえたのです。この組閣が可能になった背景には、シリアを訪れたサウジアラビアのアブドラ国王とアサド大統領の和解があります。フランスも直ちに新内閣の支持を表明しました。まだ波乱はつづきそうです。

もう足早に師走が訪れそうです。１２月はこの１１月と合併号で休み、次は１月号とのこと。その間に判決となってもいいように、心して有意義に過ごします。癌治療も公判９年の整理も。でも、もちろん出会いつづけた友情はずっと持ちつづけて新しい旅の準備をつづけます。変革の新年を共に！

良い年を迎えて下さい。では来年に！また。　房子

追記　１２月１日

昨日、政党のビラ配布の有罪判決が出ました。国連の自由権規約委員会からも、昨年日本政府は勧告を受けてきました。「ビラを郵便受けに配布した行為について、住宅侵入罪などで、逮捕・起訴されたという報告に懸念を有する」と述べています。国際社会では、信じがたい暴論、権力の濫用です。

ところでこの最高裁判決は私を担当している裁判官たちです。最高裁第２小法廷４人全員一致の判決。国際基準からも、庶民感覚からも離れた、この「司法判断」を直視しています。

でも、闘いつづける友人たちが居る限り、死刑停止も含めて、新年は希望が育つはずです。光あれ！の創世記ではありませんが、その明るい方向にみんなと共に！ 変革の新年を共に！　房子

読者からの声

●お体の方、芳しくないご様子ですが、食事療法には気を使ってくれているのでしょうか。（中略）

天候が定まり秋らしい日が続いています。

細々と夜を徹し鳴く雨のコオロギ
ミミズ鳴くや闇の深さの底知れず
電燈にまとわり付いてる秋蚊
一書だに届かぬ日なし鰯雲

寒さに向けて、ご要心を切に祈ります。

１０月２７日　　東京都　U.

アラブ物語(6)

リッダ闘争への道(4)

重信　房子

9、引きつづく闘いのはじまり

当時のイスラエルの報復は、すさまじいものだった。イスラエルの首相ゴールダ・メイアは、報復を宣言した。

「アラブのテロリスト諸団体は、ただの殺人と流血に飽き足らず、傭兵を使って、彼らの呼号する“世界革命”をやろうとした。事件のニュースを聞いて、カイロとベイルートから歓喜の声が上がった。戦場で、我々に蹴散らされている連中が、飛行機に爆弾を仕掛けたり、無辜の人々を殺害することで英雄となっている。テルアビブ空港の虐殺を喜んだアラブ諸国政府は、この事件に対してすべての責任を取らねばならない」と。

そして、この宣言どおり、数倍の虐殺を行った。レバノン南部の村、パレスチナ難民キャンプ、バーシムたちの居たバールベックや北部トリポリまで、空爆した。百数十人ものパレスチナ人、レバノン人が死傷した。レバノンは国家非常事態宣言を発した。そして、国連に提訴したが、いつものようにイスラエルは無視して、爆撃を続けた。

当初、バーシムたちの闘いは、ＰＦＬＰの作戦としてパトリック・アルグレロ隊の無名戦士として闘い果てる計画であった。しかし、アハマッド岡本が生き残った。彼は、「我々はレッドアーミーである」と宣言した。その名は瞬く間にアラブへ、世界へと広がった。アラブでは、英雄戦士の希望のレッドアーミーとして、そして、イスラエルと日本では「狂気のテロリスト」として。

あの作戦の日、５月３０日、ガッサン編集長は、アル・ハダフのスタッフを集めて、階下のＰＦＬＰ専用のような小さなレストランで、みんなに昼食を振舞いながら、こう言った。「明日からマリアンは旅行に出るから、スタッフ休業だ」と。そして、私の目を覗き込みながら、小声で「夕方に保安局の人たちが君のところに行くから、荷物を整理しとくといいよ」、そんな風に言っていた。そしてみんなとアラブ式にハグして、５月３０日、アル・ハダフを後にした。

私は、今から考えると、案外高をくくっていたのか、数日の避難という風に考えていた。だから、手荷物をまとめただけだった。(そのアパートには、結局戻れなくて、ＰＦＬＰの人が引越し荷物を整理に行ったのだが、リッダ闘争の事件を知った大家が涙を流して、日本人に感謝を伝えていたと言う。そして、お金は要らないから、この部屋を空けておくので、いつでも帰ってきてほしいと話したらしい。そんな訳で、そこはＰＦＬＰの仲間がただで住むことになったと聞いた。)

夕方から、親しいパレスチナ人の友人たちも、保安局の人も来た。そして、ニュースを何度もチューニングしては、時報の度にニュースを待っていた。「ムシュマオール(ありえない)」彼らはニュースが無いことに苛立っていた。私はいつ起こるかわからなかったが、バーシムたちが任務に失敗するはずはないと確信していた。

深夜１２時のＢＢＣが「スリー ガンマン アタック アット テルアビブ エアポート」と、最初のニュースで告げた。ああこれだ、これだったのか、闘いは予定通りだという。一人が生きて捕まったと言う。アハマッド岡本に違いない。バーシム、サラーハ、アハマッド良くぞ闘った、パレスチナのために、ありがとう。やったね。と思った瞬間に、後悔と悲しみがどっと押し寄せた。ただ、任務を！ というベクトルに抑え込んでいた思いがどっとあふれ出た。けれども、彼らはそれを望んだのだ。闘うことによって、彼らの意志を引き継がなければならない。泣かないぞ明日からは。そんな思いだった。

中国帰りの友人の一人が持ち帰った、中国語のインターナショナルのレコードをかけて、中国の小学生に貰ったという赤いスカーフを私の首に巻きながら、「おめでとう！ ありがとう日本の同志たち！」と泣き出した。

興奮のままに少し仮眠した後、夜が明けないうちに、みんなとそこを離れて、私は新しいシェルターに入った。暁闇にジャカランダの花が輝いているのを見上げながら、新しい部屋に入った。遠くで叫び声がする「これはリッダ闘争の号外を叫んでいるんだよ」と、パレスチナの友人が伝えてくれた。

私は６月はじめに、日本人会の友人たちとアポイントがあったが、連絡も許されず、不義理してしまった。

それでも彼らの方から、アル・ハダフに日本語新聞を届けてくれて、「無事で生きていてくれ」と走り書きが添えられていた。そして少し経って、そのうちの一人に会った。リッダ闘争には、みんなも仰天したと言う。「誰が驚いたって、一番驚いたのは俺たちだよな！」と、大使館で常連たちが語り合ったと言う。それにリッダ闘争のおかげで、日本人はどこに行っても優遇されて、ありがとう！と言ってるよ。特に、ビジネスには弾みがついてありがたいと。でも、日本政府はイスラエルに謝罪なんてとんでもないことして、皆怒っているよ。日本商品がボイコットされないように、彼女に頼めよと言う声まであったという。

そして、彼女は作戦を知ってたのだろうか？ いや知ってたはずはない、と論争になったと教えてくれた。「知らなかったけど、少し知ってたと言えなくもないかな」と答えた。

作戦直後、アハマッド岡本は共に闘った同志の遺体を見せられ、号泣し、死ねなかった自分を悔いたらしい。それを利用して、イスラエル当局は、「供述と引き換えに、自決用のピストルを渡す」と約束した。アハマッド岡本は供述し、ピストルを渡された。しかし、彼がピストルの引き金を引いた時、弾丸は入っていなかった。当然のことだったが騙されたのだ。これは後の軍事法廷で、明らかにされた。

その際の供述で、時間稼ぎにニザール丸岡を助けるためだったのか、アハマッド岡本は「ローマでジュンという女性に会って、武器を受け取った」と、作り話をしたらしい。それで、マスコミは「ジュン探し」で沸き立っているという。「ローマのジュン」とは誰かと。もちろん、５月３０日の当日まで、ベイルートに居た私であるはずがない。そんな話で、日本人会はもちきりだという。大使館の連中も本省から「一緒に話していて、何をしていたのか」と言われると困るよなと言いつつ、リッダ闘争対策に大騒ぎしながら心配してるよ、などと笑って友人が教えてくれた。

リッダ闘争直後、日本政府はイスラエルに特使を送り、謝罪して見舞金を払った。このことで、アラブ・パレスチナの大義に泥を塗る敵対行為だ、とアラブ中から連日批判がくりかえし出ていた。日本人会が心配するのも無理はなかったのだった。「アラブ・ボイコットに、日本商品を入れるべきだ！」と、大きなキャンペーンがつづいた。

公開されている当時の外交文書によると、アラブ各国の日本大使館から「対日経済ボイコットが議題とされつつある」と伝え、「総理または大臣のアラブ向け声明の発出方至急ご考慮を」と打電している。私も意見を求められた。

私は、日本人会の人たちの苦労を知っていたので、商品ボイコットよりも日本政府の中東政策を問題にするべきだと伝えた。ことに、アラブに居る日本人たちは、あまりのイスラエルのひどさにアラブ寄りなのだから。

また、アル・ハダフには、友人知人の特派員ばかりかフリーランスの記者や新人の日本人記者が押しかけた。日本でのスキャンダル探しのように、執拗な取材には、アル・ハダフは慣れていない。アル・ハダフの建物は警護部隊が３ヵ所からビルを防衛している。そんな中での統制された記者会見に業を煮やしたのか、日本の記者がビルの近所の人たちに取材をはじめた。私が出入りしてたかなど聴くのに、記者のマナーを超えて、金も渡していると言う。

ＰＦＬＰ保安局では、敵の手先かもしれないので、拘束して尋問すると決めた。日本の特派員らはカイロもベイルートも顔見知りで、そんなことはしない。きちんとルールを守って取材している。そんな訳で、ガッサンの要請で、保安局が動いた。

警戒中、３人の日本人を発見。拘束しようとして近づくと逃げ出したと言う。空に向けて威嚇射撃しながら追いかけたが、取り逃がしてしまったらしい。

その後１時間ほどして、付近の北朝鮮貿易代表部からＰＬＯとＰＦＬＰに問い合わせがあったという。彼らのスタッフがＰＬＯと道路を隔てて、ほぼ対面にあるアル・ハダフに近づいたあたりで、拉致されそうになったと言うではないか。彼らは必死で逃げたと言う。それで分かったのだが、ＰＦＬＰ保安隊が追いかけたのは、「日本人スパイ」ではなく、北朝鮮代表部の人たちだった。ガッサンが尋ねて来た北朝鮮の人々に事情を話して詫びると、「ああ、そうでしたか……我々はまたＣＩＡに拉致されるかと、慌てて逃げたんですよ」と、大笑いになったという。この話をしてくれたのはガッサンだ。

当時、私はイスラエルの報復を避けて、ドルーズ地区へと避難場所を変えていた。そのため、会議などは山岳地帯のオリーブ林やオレンジやりんごの果樹園の中で、ピクニックのようにゴザを敷いてやっていた。りんごの花のいい香りの下で、素焼きの水入れを置いて会議した。また、アラブのこってり煮込んだ甘ったるい紅茶を飲み、語り合った。

あの会議の後、数日して、ガッサンはイスラエルのモサドの自動車爆弾で爆殺された。朝、車に仕掛けら

れた爆弾がエンジンを入れたとたんに作動し、登校予定の姪共々虐殺された。アハマッド岡本の軍事裁判の始まる２日前の７月８日のことであった。

リッダ闘争で歓喜し、勢いづいたパレスチナ解放勢力の有名無名の人々をイスラエルは無差別に殺しつづけた。それでもイスラエルによって、パレスチナが占領されている限り、パレスチナ解放を闘う者は増えることはあっても、決して減らないだろう。闘いは生きることそのものだから。

すでに帰国の途上にあったニザール丸岡は、スイスにいた。彼はリッダ闘争の翌朝にベイルートを発ったのだが、当時の私は別々に行動していたので、彼の最後の出発の朝は知らない。後に聞いた話では、彼はベイルートで、新聞を買おうとして「お前日本人か？ ありがとう。金は要らない。すばらしい闘いがあった。」と言われたらしい。

その後、ベイルートを発ってスイスに来た。スイスからアジアの国のビザを取って、経由し、日本に帰国する予定らしかった。彼はスイスで、いつも読んでいた英字新聞が売り切れで、たまたまヘラルドトリビューンを読んだという。そうしたらそこに、リッダ闘争の第４の男として、自分の本名が出ているではないか。丸岡修の行方を捜されていると書いてあったという。まるで他人の名のように、新聞の自分の名を知ったと後に語っている。彼はどのように行動すべきか一人で考えた。その時彼は２１歳だった。検問やパスポートコントロールでの自分への手配が動き出さないうちに、即座に移動した方がよいと判断した。ベイルートから本名の航空券でここまで来た。自分の居場所として、スイスが出るのは時間の問題だろう。

彼はアルプスの山中で、みんなとバールベックで訓練した時に、記念に持ち帰った石のかけらを決意を込めて放り投げたという。そのとたんに、一天かき曇り雷鳴が轟いたのは、驚きと共に忘れられないと、後に語っていた。リッダの仲間たちの声のように心に響いたという。

彼は慎重に行動し、スイスから他に移動し、そして潜伏しながら、日本への帰国を一時中断することにした。事態を把握した方が良い。一旦アラブに戻ろう。バーシムたちとの約束を果たすのに、一番ふさわしい方法を再検討すべきだと決断したためだった。

こうしてニザール丸岡は、アラブの地に戻った。そして７２年９月、ミュンヘンオリンピック攻撃事件の最中に、日本公安は、ニザールを謂れもなくリッダ闘争事件で国際指名手配した。このため、彼は帰国の道を断たれ、アラブからの闘いを担わざるを得ない条件に置かれた。日本では、アラブで闘いたかったユセフ檜森をはじめとするバーシムの仲間たちは国際攻防の弾圧にさらされ、逮捕弾圧されていた。

その中から、以後、ＶＺ５８も、日本赤軍も生まれていくのであった。

後に私の父は、リッダ闘争について、人民新聞でこんな風に語っている。

「テルアビブ空港事件ほど世の中を騒がせた事件も他になかったと思いますが、あの連中ほど私心を忘れて理想に生きた者もまれだったと思います。あんなきれいな生き方をしたにもかかわらず、あの連中ほど恵まれない死に方をしたのもまた少ないと思います。私はあの純真な魂をそのまま葬る気になれず、あの三烈士の労苦をねぎらうために、あるいは冥福を祈るために詩を作ってみました」と、以下のように記しています。

テルアビブ空港三烈士を憶う

中東初夏軟風麗　中東の初夏軟風うららかに
良民鼓舞謳繁栄　良民鼓舞して繁栄をうたう
一天突如雷鳴起　一天突如として雷鳴起こり
霹靂劈天陽光暗　霹靂天をつんざいて陽光暗し
銃弾乱飛空港裡　銃弾乱れ飛ぶ空港のうち
身命共抛烈士魂　身命共になげうつ烈士の魂
大義似不孝滅親　大義は不孝に似て親を滅ぼす
毀誉褒貶非所意　毀誉褒貶意とするところにあらず
魂魄志久遠理想　魂魄志す久遠の理想
蝉脱憩天顧戦蹟　蝉脱し天に憩いて戦蹟を顧みる
遥瞰雲海横空間　遥かに雲海を見下して空間を横切り
宿青星衛瞰下界　青星に宿ってとこしえに下界を見る

リッダ闘争は、パレスチナ解放闘争の新しい希望を示すＰＦＬＰの闘いであった。ＰＦＬＰの指揮下で、共同武装闘争を自らの使命とする者たちが義勇兵としてその闘いに志願した。赤軍派系も、またパルチザン系も、みながアラブの地で、持てる力を発揮してＰＦＬＰに結集した。

そしてリッダ闘争によって切り開かれた地平から、後を託された者たちが、新しい主体へと自己を飛躍させようとしていた。アラブでは圧倒的な支持と熱狂の中から、アラブ赤軍（のちの日本赤軍）を生み出し、日本ではかつてない弾圧の中で、敗北の中から、ＶＺ５８として再生が試みられた。

「リッダ闘争は赤軍派の最後を介錯し、京都パルチザンの終焉を告げる闘いでもあった」と、ユセフ檜森は語っている。（「水平線の向こうに」２００５年）微視的に言えばそう言えるが、巨視的にはリッダ闘争の切り開いた地平は、国際主義による連帯を世界大に押し広げた。そして、世界の各地から、さらに共闘を求めて志願が広がった。パレスチナの闘いに連帯し、また自国の闘いにパレスチナ側の支援を受けた。そうした連帯を力とした共同が広がった。さらに、パレスチナ解放闘争におけるＰＦＬＰの活動とＰＦＬＰへの支持を作り出した。こうした闘いによって、以降、日本赤軍をも生み出していった。リッダ闘争がなければ、ＶＺ５８も、日本赤軍も誕生し得なかった。リッダ闘争は、後の日本赤軍誕生の闘いであった。そして、またリッダ闘争は、国際階級闘争の中で大きな可能性を育てた。

そして、バーシムは自分たちの闘いが、その後パレスチナのこれからの歴史に刻まれることをよく心得て旅立った。

シゲに捧げる「私小説」その80

山田美枝子

お元気ですかシゲ！小菅に面会に行きたかったのですが、今世界中に新型インフルエンザが猛威をふるいだしていて、私の三人の孫も次々に罹り、大いに心配したここ一月だったのです。私はうつりませんでした。来週あなたに会いにいくわ！小説をつづけます。

私の可愛い一人息子のルイは四歳になった。夫の剛志は溺愛している。しかし剛志の癌という病気で、この幸せがもう終わるのだろうか。

剛志はレナに思い切り悪態をついてから眠ってしまった。夢とうつつの間で、剛志は五歳になっていた。母親の使いでひとりで井の頭線に乗り、吉祥寺まで買い物にきていた。久我山の自宅から吉祥寺までの電車賃を節約するためにいつもママからお使いをいいつかった。剛志はひとりではないと見せかけるために乗るときも電車を降りて改札を出るときも、やさしそうなママくらいの人の前後をなにげない素振りで歩いてやりすごした。買い物をして家に帰るとママが「ありがとう」とやさしくいってくれる。おれは幼い心で、母親を助けているのだと鼻をひくひくさせた。まだ三歳の弟と赤ん坊の妹の世話でママは大変なのだ。

そしてエリックと皆に呼ばれているドイツ人と日本人の混血の父はとても節約家だった。おれは買い物のお金しか持たされず買い物に行ったし、近所の子供が紙芝居に小銭をにぎってきていても、一度も金を親からもらったことはなかった。いつも中国人の金をたくさんにぎっている子供のうしろについて歩き、紙芝居屋が売る飴やせんべいを分けてもらって食べていた。おれは父に似た、大きな背丈や外人風の目鼻立ちのせいなのか子分ができやすかった。

父に比べママは上品な純日本女性だった。大正十年に西村伊作が創立した文化学院出身のリベラルな意識の高い女性だった。しかし、いやだからこそか、ドイツ人とのハーフの父に絶対的に従って、尊敬していた。おれはそんなママが子供心にもいじらしいと感じ、懸命に子供ながらフォローしていた。ママはおっとりと食事の用意をした。おなかがすききって待っている弟妹を我慢させながら遊ばせるのもおれの役割だった。

おれが大学生になったとき親父が言った。

「入学金と四年間の月謝は払ってやるが、小遣いなどはやらん、自分で考えろ、おれもそうやってきた」

親父に頭は上がらなかった。親父は旧制中学から寮に入り、それから大学、社会人になりママと出会うまで一人で暮らしたのだ。おれは大学に入学してすぐ、広いキャンパスを金髪をなびかせて颯爽と歩く女の子を見つけた。おれは話しかけた。「日本語に不自由ない？」

キャシーは、日本語むずかしい、と答えた。おれは、「日本での生活をサポートしてあげるよ、もちろんアルバイトでね」

と有料であることを強調した。まもなく彼女の下宿先も我が家の一室になり、四年後に彼女がオーストラリアに帰国するとき、おれは彼女の婚約者としていっしょにオーストラリアに渡ったのだ。そして子供が二人生まれた。キャシーのスリムだった身体は、オージービーフの食べすぎというか、フィシュ&チップスが好きなせいもあり、どんどん太り、そのうえかなり怠け者の女であった。　つづく

面会について

調整なしに面会に行っても、予定している面会者とぶつかれば会えないことになります。
以下の要領にしたがって、より多くの方が無駄なく面会できますよう、ご協力ください。

・面会は１日につき１組（３人まで）しか許可されていません。
・面会時間は、２分ずつ伸びて、午前中は１２分、午後は１０分です。時間を有効に使う工夫が必要です。
・面会者自身を証明するもの、運転免許証・健康保険証などを持参してください。

曜日――重信さんとの関係（調整担当者）
★月曜日――明治大学の友人・知人（小川健）
★火・水曜日――一般（山本万里子）
★木・金曜日――親族と一般（大谷みどり）
＊山本万里子　TEL：090-4367-5389　E-mail： mariko481@hotmail.com
＊大谷みどり　携帯メール：midorinokeitai@docomo.ne.jp　E-mail：the-5th-element@hotmail.co.jp
＊トラブルを避けるため、重信さんには事前に面会予定日と面会者名を伝えておきます。１週間前には上記担当者と調整してください。無調整で直接行っても、重信さんはその人に会うと、予定者と会えなくなるので拒否せざるを得ません。また面会予定が不都合になった時はできるだけ早く調整者にご連絡ください。

好評発売中！
重信房子著「日本赤軍私史―パレスチナと共に」
河出書房新社刊　定価３，２００円

後　記

重信さんの腫瘍マーカーの数値がその後も下がっているとのことです。抗癌剤による副作用も軽くなってきたとのこと。良かったですね。今後も順調に下がって、癌要因が根絶されることを願ってやみません。

好評のうちに連載中の「アラブ物語」の「リッダ闘争への道」は今回で完結し、次号から「ＰＦＬＰとの矛盾―ドバイ闘争の時代」を連載します。１９７３年、リッダ闘争後の対イスラエル防衛戦に加えて、ベイルートではレバノン軍がパレスチナ人キャンプを攻撃する「キャンプ戦争」がはじまり、イラクではクーデターが起こる。そんな中での「アラブ赤軍」に至る日々のレポートです。どうぞお楽しみに。

重信さんへの最高裁判決がいつになるのか、予測不可能ですが、近いうちに出されるかも知れません。判決への異議申し立ては、弁護士も被告も３日以内に提出しなくてはなりません。それに対する最高裁からの返事は１週間後くらいです。異議申し立てが却下された場合、その２週間後くらいに刑が確定します。刑務所への移監はすぐにではありませんが、処遇は刑務所に移監された場合と同じで、懲役が課せられ、面会は月２回、外への発信は月４回に制限されます。皆様、その前にどうぞ重信さんへの接見に出向いてください。

１２月号を１１月号と合併号にさせていただきました。次号は１月末に出します。皆様良いお年を！　Ｙ

連絡先　〒105-0004　東京都港区新橋2-8-16　石田ビル４階
救援連絡センター気付　「重信房子さんを支える会」
郵便振替　00110-4-613941　オリーブの樹
銀行口座　三井住友銀行　赤羽支店　226-3687269　オリーブの樹
www.geocities.jp/setfreemarian/index.html

頒布価格　５００円

「正誤」表

第94号

①10P（11/9）左上から17行目　　らテン・アメリカ→ラテン・アメリカ